

平成21年 5月15日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520433
 研究課題名（和文） 幕末期諸藩軍制改革の比較史的研究
 研究課題名（英文） A comparative study about the military reform of the various clans in the Bakumatsu Period

研究代表者
 三宅 紹宣（MIYAKE TSUGUNOBU）
 広島大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：10124091

研究成果の概要：幕末期における諸藩及び幕府の軍制改革の比較史的研究を行い、西洋式軍事技術の導入が最も進展していたのは、幕府陸軍であり、海軍においても諸藩を圧倒していたことを明らかにした。長州藩は、軍事技術導入では幕府に及ばなかったが、諸隊と家臣団隊の西洋式軍事組織への編制替えを徹底して進め、散兵戦術を駆使することにより、幕長戦争において、武器装備で勝る征長軍に勝利することが出来たことを解明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	800,000	0	800,000
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	400,000	120,000	520,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,200,000	270,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本近世史・日本近代史・明治維新・幕末期・軍制改革・長州藩

1. 研究開始当初の背景

(1) 明治維新史研究の課題

明治維新史研究は、研究が個別分散化して全体像が見えなくなっており、とりわけ近代国家を成立させた政治勢力の特質と、幕府を崩壊させる事が可能となった軍事力の解明が不十分であった。軍制改革の研究は、個別の藩を対象に行なわれてはいるが、単独の研究であるため、その客観的位置づけが成されていなかった。かかる状況の中で、軍制改革を比較史的手法によってその全体像を解明することは、重要な課題であった。

(2) 明治維新史研究の世界史的位置

明治維新は、近代革命として、また近代化

のモデルとして世界各国で注目され、また熱心に研究が行われている。この中で明治維新を世界史の中に位置づけ、研究を深化させ、世界に向けて明治維新史研究の研究成果を発信することは、重要な課題であった。

2. 研究の目的

(1) 諸藩軍制改革の比較史的研究の意義

本研究は、幕末期諸藩及び幕府の軍制改革について、比較史的手法によって研究を深化させようとするものである。幕末期における諸藩及び幕府は、対外的危機と国内矛盾の激化の中で、軍事力の強化を目指して軍制改革に取り組んだ。改革の方向としては、西洋軍

制の採用によって軍備の強化を果たそうとするものであったが、それは単なる洋式軍事技術の導入で済む問題ではなく、軍制の基本をなす封建家臣団の編成替えを不可欠とするものであった。諸藩は藩内の実情に応じて改革に取り組んだが、保守派の抵抗もあり、その過程は困難を極めた。しかし、保守派の抵抗を押さえて改革に成功した藩は、強力な軍事力を創出することができた。

本研究は、幕末期の雄藩として長州藩、薩摩藩、佐賀藩、会津藩、和歌山藩、及び全国政権としての幕府を対象とし、それぞれの軍制改革を分析し、その基礎的諸事実を解明する。その上で、改革に成功した長州藩、薩摩藩、佐賀藩と、幕末の最終段階においても西洋軍制の導入ができなかった会津藩を比較研究することによって、なぜそのような結果となったかを考察する。このことによって、薩摩藩、長州藩が幕府崩壊の主導的役割を果たすことができた要因についても明らかにする。

(2) 諸藩軍制改革の比較的研究の課題

幕末期諸藩の軍制改革については、個別藩政史の分野において、それぞれの藩の幕末期の分析によって取り生まれ、明治維新史研究においては、政治的主体の活動の背景として軍制が触れられるが、その全体像がつかめていない。

軍制改革の分析は、藩ごとに行なわれているが、それらを比較検討した研究はこれまでにない。比較することによって西洋軍制導入にあたっての問題点、家臣団の編制替えの実態がより鮮明となる。たとえば薩摩藩の改革は、家臣団の給地高の編制替えとして取り生まれ、長州藩は諸隊という有志による新軍事力の創出として行なわれたと言われている。しかし長州藩においては、家臣団も西洋軍制に編制替えされており、諸隊と家臣団隊を総体として分析する必要がある。比較によってこのような視点が出てき、また、相互の藩の影響関係や、改革時期のずれが明らかになる。さらには幕府崩壊の上で大きな役割を果たした幕長戦争について、軍事問題の特質を実証的に解明する。

3. 研究の方法

(1) 史料収集

長州藩、薩摩藩、佐賀藩、会津藩、和歌山藩、幕府の軍制改革にかかわる史料の収集を目指し、下記機関の史料調査を実施した。その上で、撮影により史料を収集し、解読、分析を行った。

① 東京大学史料編纂所

島津家文書中の薩摩藩軍制改革史料。残存史料の少ない会津藩軍制改革関係史料を補充するため、維新引継本及び「大日本維新史料稿本」からの抽出作業。幕府騎兵組士

由利元十郎の従軍日記「長防御進発御供道中広島在陣中日記附大島郡討入大野村玖波戦争日録留」、和歌山藩付家老水野忠幹家臣細井八郎左右衛門の従軍日記「芸州表出陣中日記」などの収集と分析。

② 国立国会図書館

全国諸藩の動向にかかわる自治体史及び軍事史関係の基本文献などの調査・収集。長州藩軍制改革にかかわる広沢真臣、井上馨文書の調査・収集。

③ 国立国会図書館関西館

幕末軍事技術関係の史料の調査・収集。

④ 山口県文書館

毛利家文庫、県庁伝来旧藩記録、両公伝ほか長州藩軍制改革関係史料の調査・収集。「四境戦争一事」ほかのデータ入力と分析。

⑤ 鹿児島県歴史資料センター黎明館

薩摩藩軍制改革関係史料の調査・収集。里島津家史料ほか。

⑥ 佐賀県立図書館

佐賀藩軍制改革関係史料の調査・収集。

⑦ 会津若松市立図書館

会津藩軍制改革関係史料の調査・収集

(2) 分析

収集した史料のデータを大量観察による史料操作と比較検討により、軍制改革の分析を行った。さらに東京大学史料編纂所の I S I N (維新) データベースにアクセスして情報を活用することにより、分析の深化を計った。

4. 研究成果

(1) 諸藩軍制改革の基礎的研究と幕長戦争の研究成果

研究の過程で大量の史料を収集し、解読を行った。それを基にして、各藩及び幕府の軍制改革の基礎的研究を行った。しかし、軍制改革の実態と成果が最も顕在化して現れるのは戦争場面においてである。よって、1866年の幕長戦争について、戦闘場面における軍事技術、軍事編制、指揮命令系統等について集中的に分析した。

この結果、幕府陸軍歩兵組及び和歌山藩が、幕末期において最も西洋式軍制が進展していたことが判明した。しかし、征長軍のうち諸藩の軍隊は旧式の軍事組織のままであり、混成部隊であったことにより、統一的指揮に欠け、藩庁政事堂の統一的指揮のもと、均質に西洋式軍隊化された部隊の効率的軍事運用を行った長州藩に敗退した。この結果、改革途上のみであった幕府旗本軍の西洋式軍隊への改変が取り込まれることになった。

さらに、会津藩は幕府の指導を受けて軍制改革を開始した。しかし、旧来の弓矢や槍術の師家の抵抗が強く、家臣団の西洋式軍制化は難航し、その達成は幕末期においては困難であった。この点、旧来の武術勢力の抵抗を

押さえつけ、軍事改革を断行した長州藩と異なっていた。また、幕府海軍は、幕末期において最新・最強の軍艦をそろえており、小型軍艦5艘のみの長州藩海軍を圧倒した。しかし、軍艦の効果的運用に欠け、軍事作戦の稚拙さから、軍事技術面での有利さを生かすことが出来なかった。

幕長戦争における各方面の詳細な戦闘状況と長州藩及び幕府・諸藩の軍備については、以下のような実証的研究成果を得た。

(2) 幕長戦争の開戦と大島口戦争

①幕長戦争は、慶応2年(1866)6月7日、幕府軍艦の長州藩領熊毛半島先端への艦砲射撃に端を発し、6月8日、征長軍の大島郡油宇村、安下庄、久賀村への先制攻撃によって開戦した。

②長州藩の藩庁政事堂は、6月8日の征長軍攻撃の報知を6月10日夕方受け、その夜、抗戦を決断し、反撃を指令した。政事堂は、戦争全体の指揮権を掌握し、部隊の移動等、作戦の統一的指揮を行った。組織的な部隊の運用は、征長軍と比べて圧倒的に少ない兵力を有効に生かす上で、効果を上げた。

③長州軍は、諸隊はもとより、家臣団隊も、小隊組織に編制されて西洋軍制化されていた。これらの隊が、方面軍本陣の指揮下に置かれ、密接に連携を保ちつつ戦闘を展開した。

④長州軍の作戦は、地形を巧みに利用し、制高を重視し、大砲・小銃を活用するものであった。また、大木・大石の投擲、音による圧迫、篝火による心理的威圧等、あらゆるものを総動員し、有効に活用した。

⑤幕府軍は、西洋化された陸軍歩兵部隊と、海軍蒸気軍艦からの艦隊射撃を組み合わせた当時最新鋭の強力なものであった。

⑥松山藩軍は、旧式の軍事編制であり、戦闘方法も旗差物の使用、首級への執着等、旧態依然たるものであった。

⑦長州藩側の勝因に、地元民衆の征長軍への抵抗運動、声、篝火、兵糧提供等による長州軍への支援があった。

総じて大島口戦争においては、幕府直轄軍は、最新の西洋式装備の陸軍及び海軍を有効に生かす事が出来ず、運用面と兵士の習熟度に欠陥があった。

(3) 幕長戦争芸州口戦争

①幕長戦争芸州口戦争は、6月14日、高田藩軍による岩国藩領和木村への砲撃により開戦し、8月9日、征長軍の広島藩領大野村から広島城下への撤退により終結した。さらに、9月2日、宮島大願寺において、長州藩代表の広沢真臣と幕府代表の勝海舟の間で休戦講和が締結され、征長軍は広島から撤退した。

②長州軍は、藩庁政事堂の統一的指揮のもと

部隊の配備を行ない、広島藩との境にあたる小瀬川口と山代口の二方面軍を編制した。方面軍本陣は、各部隊を統括し、密接に連携を保ちつつ作戦を展開した。

③長州軍は、諸隊はもとより、家臣団隊も基本単位は小隊組織に編制され、西洋式軍隊に編制替されていた。諸隊および家臣団隊は、各作戦において混成して戦闘を遂行した。

長州軍の戦術の特質は、散兵戦術を駆使したことにある。この戦術は、兵士を適当な距離に散開させて行う戦術である。少数の兵で多数の兵に立ち向かう場合に有効であるが、兵士が広く散開しているため指揮官の命令が行き届かず、その分、兵士各自の自発性が要求される。「長門練兵場蔵板 活板散兵教練書」(山口県立山口図書館蔵)は、「此陣法ニ於テハ、密収(ママ)隊ニ於ケルヨリモ、各兵士独立ニ進退シ、多クハ自己ノ識ヲ以テ動作スヘキハ、知ルヘキナリ。此ヲ以テ、此隊ノ兵士ヲシテ、努テ独立動作シテ、機ニ投スルノオヲ延サシメ、且其人ノ精神ヲ砥磨セシムル書」と記し、兵士各自の自発性の重要性と独立心の涵養を強調している。散兵戦術は、西洋式戦法の核心であり、有志が志願して編制した士気の高い諸隊において、初めて習熟し実行することが可能な戦術だったのである。

また、長州軍は、山岳地形を巧みに利用して、制高を重視し、ミニエー銃を標準装備して遠距離からの狙撃を中心とする作戦を展開した。

④長州軍は、軍夫の動員体制を確立し、かつ、民衆の協力もあって、兵站を確保した。また、広島藩領においても民衆に配慮した施策を行って民衆を味方に付けた。これに対し、征長軍は、軍夫の逃亡が相次ぎ、作戦に支障をきたした。さらに広島藩領の民衆を抑圧したため、民衆の反発を招いた。

⑤征長軍は、旧式の諸藩軍もいたが、幕府歩兵組や和歌山藩軍は、西洋式軍隊であり、また、軍艦は、当時最新最強の軍艦をそろえており、その艦砲射撃は、芸州口に軍艦が配備されていない長州軍を悩ませた。

総合的にみれば西洋式装備では、質量ともに征長軍のほうが長州軍を上回っていた。このことは、長州軍は、優れた西洋式兵器によって勝利したとする通説は正確ではなく、むしろ散兵戦術など西洋式戦法に習熟し、それを十分に使いこなした点に勝因があったといえる。西洋式軍隊は、兵士に銃を持たせれば済むという単純なものではなく、組織や兵士の改革が達成されて初めて有効なものになることを明らかにした。

(4) 幕長戦争石州口戦争

①幕長戦争石州口戦争は、益田防備のために布陣した浜田藩軍・福山藩軍に対し、6月1

5日藩境を越えて進んだ長州軍の攻撃により開戦した。長州軍は、散兵戦術を駆使し、ミニエー銃による狙撃に習熟し、少ない人数を有効に活用することにより、封建制軍隊である征長軍を敗退させた。また、戦争の目的を積極的に情宣し、民衆に対する細かな配慮をすることにより、民衆の支持を得て、兵站も順調に機能し、戦争を有利に進めることが出来た。

②福山藩軍は、一部西洋式装備であったが、基本は旧式の軍事編制であり、軍夫の逃亡などもあって、長州軍に敗退した。

③浜田藩軍は、旧式の軍隊であり、民衆の抵抗により軍夫の動員が順調に機能しなかった。

④石州口に配備された和歌山藩軍は、旧式軍隊で、士気が低く、また石見国の民衆を虐待したため、民衆から追われる事態となっている。

⑤松江藩軍は、武器は西洋新式であったが、積極的参戦は行わなかった。

⑥鳥取藩軍は、武器は旧式であり、戦闘への出動がほとんど無かった。

⑦石見国民衆は、物価高騰の救世主として長州藩を支持し、征長軍の軍夫動員に抵抗運動を起こした。また、動員された後も、逃亡を繰り返し、征長軍の軍事作戦遂行に支障を与え、長州軍勝利の要因の一つとなった。

(5) 幕長戦争小倉口戦争

①幕長戦争小倉口戦争は、長州藩攻撃のため集結した小倉藩軍に対し、6月17日、長州軍は関門海峡を渡海して攻撃したことにより開戦した。長州軍は西洋式戦法に習熟しており、とりわけ散兵戦術を駆使した。さらに、藩庁政事堂の統一的指揮のもとで、効果的な部隊や軍艦の配置が行われ、各部隊、軍艦、下関に設置した砲台の密接な連携のもとで作戦を展開した。

②小倉藩軍は、西洋式軍隊は一部のみであり、大砲などは優秀なものを装備していたが、旧来の軍事編制のままの軍隊であり、有効に使いこなせず、長州軍に敗退した。

③熊本藩軍は、軍制改革への抵抗から、旧来の軍事編制のままの軍隊であったが、最新の大砲を装備し、小倉城下を目指した長州藩に対し、高所の陣地に拠って防御する戦闘であったため、力攻めをした長州軍を敗退させた。

④幕府軍は、ミニエー銃を装備した西洋式軍隊であったが、専ら防備を担当し、戦闘には投入されなかった。また、海軍は、当時最新で最強の軍艦を持ち、小型軍艦5隻のみで、しかも蒸気艦は2隻のみの長州海軍を圧倒していたが、大島口、芸州口と分散的に軍艦を使用し、各艦の戦闘の稚拙さから効果的な作戦が出来なかった。

⑤村落の動向では、長州藩では、農兵によ

る地域の防備体制が確立し、背後を突かれる憂いなく作戦に集中出来た。また、軍夫の動員も、困難な状況ではあったが、支障なく行われた。これに対し、小倉藩では、軍夫の逃亡が相次ぎ、また、動員への抵抗があり、戦争遂行に影響を与えた。

総合的に見れば、長州軍は、西洋式軍制に習熟し、民衆を味方につけることによって勝利したといえる。このことは、長州藩慶応軍制改革の一応の達成を示すとともに、民衆の支持を得ることが出来なかった幕府が、慶応3年の政治過程において崩壊の途をたどることにつながるであろう。

(6) 幕長戦争をめぐる国際問題

幕府は、幕長戦争において各戦線で敗退を続けた状況を挽回するため、フランスの軍事援助を要請した。要請の事実、幕閣小笠原長行、同板倉勝静、徳川慶喜のフランス公使ロッシュへの働きかけの内実を明らかにすることによって実証した。これに対しロッシュは軍事支援を承諾し、その手配に奔走している。また、征長副総督本荘宗秀のように、長州藩攻撃のためフランスの軍艦を借用する戦争計画を構想している者の存在も確認出来る。

本荘は、当時の全国の軍事状況について次のように把握している。すなわち、「当時砲隊之開ケ候は、第一公辺之陸軍等と講武所、第二薩州、第三鍋島、皇國中此三つ計、ミネールを放候位、実用ニ涉り真之御用ニ立候、又爰ニ長防之徒ハ不殘農兵ミネールニ而、穢兵迄同様ニ而、困却之一つ」と、最も軍備が進歩しているのは幕府陸軍と講武所、次は薩摩藩、更に佐賀藩であり、長州軍は、農民にミニエー銃を持たせて強力であるとしている。幕閣の全国諸藩の軍制改革の実態認識として注目される。

フランスからの軍事援助は、征長軍の敗退によって幕府側から長州藩に休戦を申し入れたことにより、大規模な援助は実現しないまま終わった。しかし、西洋列強に敗退した経験を持つ長州藩にとって、フランスからの幕府軍事援助の問題は、重大な脅威であり続けた。一方で、フランス本国外務省は、ロッシュの外交政策に違和感を持ち始めていた。この本国の動きは、当時ヨーロッパに派遣されていた薩摩藩留学生によって素早くキャッチされた。この情報は、薩摩藩の手によって、長州藩に伝えられた。慶応2年8月12日、西郷従道は、広島から山口へ行く途中、岩国に立ち寄った。そこにおいて岩国に滞在中の広沢真臣や芸州口方面軍の諸隊長官の河瀬安四郎等および岩国藩要人と当面する形勢について会談した。その中で西郷は、「仏より日本在留之ミニストルは、所詮幕府を助ケ候論之由ニて、国元ニおゐてハ左ハ無之、

然はミニストルを追々差替ニ可致との事之由、本国にて薩州人承り候との事」と、ロッシュとフランス本国が乖離しているという重要な情報を伝えた。この情報は事実に基づいたものであり、やがて明治元年、ロッシュは本国召還となった。

ロッシュが必ずしもフランス本国の支持を受けていないという情報は、ロッシュの威圧を受け続けていた長州藩にとって、戦争遂行の自信を与える上で、有益な情報であり、それは薩長盟約に基づく薩摩藩の支援の一環であった。薩長盟約の成果が、このような国際的問題にまで有効性を発揮していることを解明した

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 三宅紹宣、幕長戦争芸州口戦争の展開過程、史学研究、263号、37-54、2009年、査読有
- ② 三宅紹宣、幕長戦争石州口戦争の展開過程、山口県史研究、17号、1-18、2009年、査読有
- ③ 三宅紹宣、幕長戦争小倉口戦争の展開過程、山口県地方史研究、100号、3-19、2008年、査読有
- ④ 三宅紹宣、長門練兵場蔵板散兵教練書、山口県史研究、16号、51-62、2008年、査読無
- ⑤ 三宅紹宣、幕長戦争をめぐる国際問題、山口県地方史研究、97号、1-14、2007年、査読有
- ⑥ 三宅紹宣、幕長戦争大島口戦の展開過程、山口県地方史研究、94号、1-18、2005年、査読有

[学会発表] (計3件)

- ① 三宅紹宣、幕長戦争小倉口戦争の展開過程、広島史学研究会、2008年10月26日、広島大学
- ② 三宅紹宣、幕長戦争の展開過程—芸州口戦争を中心として、広島史学研究会、2007年10月25日、広島大学
- ③ 三宅紹宣、幕長戦争大島口戦の展開過程、広島史学研究会、2005年10月29日、広島大学

[図書] (計2件)

- ① 三宅紹宣 (編著)、山口県 (出版社)、山口県史史料編幕末維新3、2007年、1042
- ② 三宅紹宣 (共著)、新人物往来社、動乱の長州と人物群像、2005年、104-118、126-127

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三宅 紹宣 (MIYAKE TSUGUNOBU)

広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：10124091

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者